

黙示録の8番目の王の正体—ローマとギリシャの合体 — 1

啓示の野獣とダニエルの7,8章の獣との相関図表

黙示録の7人王+ 1

五人は すでに倒れ	頭1 エジプト 
	頭2 アッシリア 
	頭3 バビロニア 
	頭4 メディア・ペルシャ 
	頭5 ギリシャ 
一人は 今おり	頭6 ローマ 
	頭7 
他の一人は まだ到来 していない	
八人目 の王	

ダニエル7章の
4頭の獣



その雄のやぎには、目の間に一本の際立った角があった。しかしその大いなる角は折れ、その代わりに際立った四つの角が生えて来て、…そのうちの一つから、別の角、小さい角が出て来た(ダニエル 8:9)

緋色の野獣
(黙示録17:11)



十本の角について言えば、その王国から起こり立つ十人の王がいる
(ダニエル 7:24)



小さなものがそれらの間に生えてきた。初めにあった角のうち、その前から引き抜かれたものが三本あった。そして、人の目のような目がこの角にあり、また大仰な事柄を語る口があった。
(ダニエル 7:8)

8 人目の王について

ヨハネがこれを記した時は、西暦 1 世紀でしたので、7 人中 5 人の王は過去の存在で、「今いる」のは「ローマ帝国」です。

この点はものみの塔も認めていて、「ダニエルの預言に注意を払いなさい」という書籍に次のように記しています。

「啓示 17 章 10 節に記されている言葉を考慮してください。「七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、他の一人はまだ到来していない。しかし到来したなら、少しの間とどまらなければならない」。使徒ヨハネはこれらの言葉を書いた時、ローマ人によってパトモス島に流刑にされていました。倒れた五人の王つまり五つの世界強国とは、エジプト、アッシリア、バビロン、メディア - ペルシャ、ギリシャでした。六人目のローマ帝国は依然として勢力を保っていました。しかしそれも倒れ、ローマに攻略された領土から七人目の王が興ることになっています。それは何という世界強国なのでしょう。」 — ダニエルの預言 第 4 章 55-57 ページ 23 節

では、その続く次の節の「今」はいつでしょうか。

全く当然ですが、10 節と同じ西暦 1 世紀でなければなりません。

「…そして、かつていたが今はいない野獣、それ自身は八人目の王でもあるが、その七つから出、去って滅びに至る。」(啓示 17:11 新世界訳)

「以前いて、今はいない獣は、第八の者で、またそれは先の七人の中の一人なのだが、やがて滅びる。」(啓示 17:11 新共同訳)

つまり、7 人目と同時期に存在する、最後の最後にわずかな期間だけ台頭する 8 人目の王は、西暦 1 世紀に、「かつていた」が、「今はいない」、そして「7 つのうちの一つ」であるということです。ここで、7 つというのは 7 番目という意味ではなく、数量としての 7 であるということです。原語のギリシャ語でも〇番目という序数と数字は異なっています。

しかし、7 つの内、かつていて、今はいない訳ですから、実際には、「すでに倒れた 5 人」の中のどれかということになります。

それで、8 人目の王は、アッシリア、エジプト、バビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャのどれかと言うことになります。

では、どれなのかと言いますと、ここで注目できるのが、ダニエル 8 章の記録です。

(ダニエル 8:8,9)「その雄のやぎは甚だしく高ぶった。しかし、それが強大になるや、その大なる角は折れ、その代わりに際立った四つの角が生えて来て、天の四方の風に向かった。そのうちの一つから、別の角、小さい角が出て来た。それは非常に大きくなっていて、…飾りとなる所に向かった」

(ダニエル 8:21)「毛深い雄やぎはギリシャの王を表わしている」

この後の描写を読んで行きますと、この者こそ、終末期に「艱難」を引き起こす「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」であることが、分かりますが、とりあえず、上に引用した記録から分かるのは、ギリシャ帝国が 4 分割された後の一つから「小さな角」が出て、「飾りの所」つまり、エルサレムを攻撃するということです。

では、この小さな角が「ローマ帝国」なのでしょうか。

そうではない、と言える理由が、この記録より 1 年ほど前に与えられたダニエル 7 章の記録を遡ると分かります。

(ダニエル 7:7 - 8)「(4 番目の獣に) 十本の角があった。わたしがそれらの角についてずっと思い巡らしていると、見よ、別の角、小さなものがそれらの間に生えてきた。初めにあった角のうち、その前から引き抜かれたものが三本あった。そして、見よ、人の目のような目がこの角にあり、また大仰な事柄を語る口があった。」

この「小さな角」はローマ帝国の後期に「起こり立つ 10 人の王」のさらにその後に出て来るものとして描かれています。

ですから、この最後の強引な角は、ローマに属する 10 人の王をさえ、踏みにじり、牛耳って、獣の主導権を得るものです。

それで、ダニエル 8 章の雄山羊とそこから出る「小さな角」に関する描写は、この 7 章で言われていた、獣から出る「小さな角」のさらに詳細な出所やいきさつを補足する描写となっていることが分かります。

このことから、かつていて、過去の 5 つから出る 8 人目の王とは、7 人目のローマを乗っ取るギリシャの王であることが明確に理解できます。

黙示録の8番目の王の正体ーローマとギリシャの合体 ー2
 ダニエルの2章の巨像の鉄と粘土そして銅との関わり相関図表



まず、ダニエル2章の巨像の最下部に注目してみましょう。

「また、足とその指とが一部は陶器師の**成形した粘土**、一部は鉄
 でできているのをご覧になりましたが、その王国は分かたれたも
 のとなります。

ですが、鉄の硬さもその中に幾分かあることでしょう。鉄が**湿っ
 た粘土**と混ざり合っているのをあなたはご覧になったのです。そ
 して、足の指が一部は鉄、一部は**成形した粘土**でできていること
 について言えば、その王国は一部は強く、一部はもろいものとな
 るでしょう。」

「鉄が**湿った粘土**と混ざり合っているのをご覧になりましたが、
 それらも人の子らと混ざり合うこととなります。しかし、鉄が**成**

形した粘土と混じり合っていないのと同じように、それらも、そ
 れとこれとが強く付くことはないでしょう。(ダニエル2：
 41 - 43) 新世界訳

「また、鉄が柔らかい陶土と混じり合っているのを御覧になったように、人々は婚姻によって混じ
 り合います。しかし、鉄が**陶土**と溶け合うことがないように、ひとつになることはありません。」(ダ
 ニエル2:43) 新共同訳

粘土には2種類ある

ダニエル2章の41から43章に「粘土」という語句が5回出て来ますが、多くの翻訳は、全て、
 「粘土」と訳しているようです。しかし、元のヘブライ語から見ますと、「粘土」の後ろに「泥」
 という語句が続いているところが2箇所あります。41節の43節のそれぞれ先に出て来る方が
 言わば「泥粘土」、その他の箇所が、単に「粘土」という語句です。

בַּחֲסָפִים טִינָא バキャサフ(粘土) ティナ(泥)
 ba·cha·saf ti·na

חֲסָפִים キャサフ(粘土、陶土)
 cnasaph

この区別を付けるために、新共同訳では、ヘブライ語[ティナ]が続いているものを「柔らかい陶土」
 と訳しています。

新世界訳は、これを「湿った粘土」と訳し、もう一方には「成形した」という、原典にはない語
 句を挿入しています。



この区別が付かないと、特に 43 節では、次の口語訳のように、混じっているのか、混じっていないのかよく分かりません。

「あなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、…しかし鉄と粘土とは相混じらないように」

それで、イメージとしては、ドロドロの陶土が、鉄の細かい空洞部分にまで入り込んで、全体の形を成している。しかし、陶土（乾いている）もしくは陶器は決して鉄と融合することはない。という意味だと思われます。

もう一つ、分かりにくいのが、多くの翻訳に見られる、43 節にある「人々は婚姻によって混じり合う」という部分ですが、これも、ヘブライ語から調べて、直訳すると、「人間の胤 [英: seed of men] によって混じる」となっており、おそらく、それまでの、帝国の王や皇帝などの世襲性の元首ではなく、一般民衆が、支配に関わるという形態を描写したものだと思います。

さて、鉄と粘土からできている特徴としてあげられている要素をまとめると次のようになります。

陶土の特徴 「分裂している（一つになることはない）」

泥粘土の特徴 「もろい部分」「民主主義（選挙による元首の選出）」

これらをダニエル 7 章の「4 頭の獣」と比較すると、4 番目の獣の後の時代に、10 人の起り立つ王がいるという描写は、陶土の特徴である、分裂している、つまりそれぞれに主権を持つ、10 人の王からなる連合軍というものに対応することが分かります。

獣に関しては、「もろさ」に関する要素は全く描かれていません。

むしろ、3 時半の期間、聖徒がその手に渡されるという描写からも、鉄の強さが継続していることが強調されています。

それで、終わりの時代に鉄の強さに混じる「粘土」は獣の 10 本の角、あるいは 10 人の王を表していることが分かります。

さてこの 2 章の巨像が作られている素材は何種類なのかということ、ここではつきりさせておきたいと思います。

金属は 4 種類、そして一番下の「足指」は決して粘土だけでできている訳ではなく、やはり鉄が使用されています。

それで、用いられている素材は、粘土を含めて 5 種類ですが、区分は 4 分割として表現されています。

(ダニエル 2:39 - 40) 「あなたの後に、あなたに劣る別の王国が起こります。次いで別の王国、三番目の、銅のものが起こり、…そして、四番目の王国ですが、それは鉄のように強いものとなります」

「5 番目の王国」などはありません。これは「4 頭の獣」と完全に合致します。

飽くまで、「粘土」は鉄に混じっている素材です。

そしてその像がついには、碎かれることになるのですが、その部分の描写に不思議な記述があることに気付きました。

それは、王が見た夢の内容を再現する描写と、「解き明かし」として述べている部分の、碎けて行く順番に違いがあるのです。

(ダニエル 2:34 - 35)「ついにひとつの石が人手によらずに切り出され、それが像の鉄と成形した粘土とでできた足のところを打って、これを砕きました。その時、鉄も成形した粘土も銅も銀も金も皆ともに碎けて…」

(ダニエル 2:45)「山からひとつの石が人手によらないで切り出され、それが鉄、銅、成形した粘土、銀、金を打ち砕いた」

注意深く読むと、夢では「鉄、粘土、銅、銀、金」という順序で描写されます。

これは、石が、像の一番下に当たることで生じるので、自然な描写です。

さらに厳密に言えば、「石は」「鉄と粘土の足」の部分に当たります。

それによって全体が崩れるのですが、「それで、像全体が…」という描写ではなく、なぜか、細かく、全ての素材を列挙しています。

描画的に表現すると、「鉄と粘土、銅、銀、金」の4つを順に挙げるのがもっとも自然だと思います。

ところが、解き明かしの説明では、「鉄、銅、粘土、銀、金」という順序になっているのです。

まして、粘土は鉄に「混じって」いるのに、銅の次のなのです。

これは、翻訳上の、単なる語句の並び違いかと思って調べて見ましたらそうではないことがわかりました。どの翻訳でもそうですし、ヘスライ語の原語で見ても、その順序になっているのです。

あと考えられる、この違いの理由は、ダニエルが、あまり気にしないで、あるいは、たまたま、ちよつと間違えて、そうってしまったか、そうでなければ、もう一つの理由。それには、そのように書くべき、預言的意味があったかのどちらかです。

それは、確認のしようもありませんが、ここでは、後者の方で考察してみました。

なぜ、銅と粘度が入れ替わっているのか。

実体の順序で表現すると、ローマ、ギリシャ、10本の角、メディア・ペルシャ、バビロニアという順序になります。

ここで、さらに、ダニエル7章の4頭の獣が、どのように殺されるのかの順番を確かめてみようと思いました。

(ダニエル 7:11-12)「わたしはその時、その角の語る大仰な言葉の響きのゆえにずっと見ていた。わたしがずっと見ていると、ついにその獣は殺され、その体は滅ぼされて燃える火に渡された。また、残りの獣たちについては、その支配権は取り去られたが、一時また一時節のあいだ命を延ばすことが許された。」

(ダニエル 7:26)「そののち法廷が座に着いて、その者の持つ支配権をついに取り去った。これを

滅ぼし尽くし、全く滅ぼし去るためである。

ここでは、獣の角の中のボスとして、小さな角が「獣」を牛耳って、行動しているときに、獣は殺される事が分かりますが、明確に分からないのが、次の部分です。

「残りの獣たちの支配権は取り去られたが、一時節、延命が許された。」というところです。

これによれば、他の王国、つまり豹（ギリシャ帝国）、熊（メディア・ペルシャ）、ライオン（バビロニア）は、支配権だけ滅びて、「獣」としては、その後幾らか、存命する事が分かります。

「一時また一時節」がどれくらいのなのかは、今のところ、まったく分かりません。

また、7:26の表現からすると、第4番目の獣でさえ、まず、司法上の裁きとして「支配権を取り去る」ことが成されます。そしてそれは、「滅ぼし尽くし、全く滅ぼし去るため」とされています。ですから、獣の裁きは、先ず「捕らえられ」つまり支配権が取り去られ、その後、滅ぼされるという段階があることが分かります。

黙示録の記述からも、「野獣は捕らえられ、…生きたまま、硫黄で燃える火の湖に投げ込まれた。」(啓示 19:20)とあり、そのことが確認できますが、他の王国がどうなったのか具体的な記述はありません。

さて、再びダニエル2章に戻りますが、今注目している2:45は、巨像の足に「石」が当たった直後の出来事を描写している場面と思われるので、その瞬間全てが、滅ぼし尽くされて、消滅するというより、その時、その順番で支配権が取り去られるということを示しているのかもしれませんが。

「支配権」についてですが、復興ローマだけは変則的なので、誰のどのようなものが、「復興ローマの支配権」と呼べるのか分かりづらい所です。

また、古代と違ってただ1人の人間が一つの国を治めるという時代ではないので、「10人の王」は「10個の政府」というのが現実的な表現になると思います。

それで、個々の政府（王）はそれぞれの国の主権を持ち、それが連合して、一つの世界強国（7人目の王）となり、さらにその末期にギリシャ出身の「小さな角」（8人目の王）が合体した形で存在しているので、「復興ローマの支配権」とは、連合国としての支配権であり、個々の国の支配権は別に取り扱っていると考えられます。

そのように全てを総合して、そのように捉えて始めて2:45の碎かれる順番の謎が解けます。

「山からひとつの石が人手によらないで切り出され、それが鉄、銅、粘土、銀、金を打ち砕いた。」(ダニエル 2:45)

とはつまり、復興ローマの連合国としての支配権、ギリシャ出身の「小さな角」の支配権、10人の王の個々の支配権、そしてメディア・ペルシャ、バビロニアのそれぞれの支配権が取り去られる。ということの意味しているに違いないという結論に達しました。